

本願一乗海

藤 嶽 明 信

(一) 一切に通ず

親鸞が法然から聞き取った教えとは、『歎異抄』に語られるように、

ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし（『真聖全』二巻・七七四頁）

という「ただ念仏」の教えである。そして、法然が語り伝えた念仏とは、本願の念仏である。その本願の念仏について法然は、

本願の念仏には、ひとりだちをさせて、すけをささぬなり。すけといふは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさす也。善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただむまれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけをささぬとはいふなり。（『法然上人全集』四九三～四九四頁）と語ったと伝えられる。本願の念仏には、智慧・持戒・道心・慈悲などという衆生の側からの助力を一切必要としない。まさしく「ただ念仏」という一事において成立する往生道である。往生ということは全く、

彼の仏の本願の行（『真聖全』一巻・九三五頁）

としての念仏の一事において成就すること以外のなにものでもない。智慧・持戒・道心・慈悲という衆生の諸能力や

諸行為を一点たりとも条件とすることなく、「ただ念仏」ということにおいて、いかなる人間にも無条件に成立する往生道、それが法然が領いた仏道であった。

けれども、従来、仏道とは、智慧・持戒・道心・慈悲などの人間の様々な善行を根拠とし、条件としてこそ初めて成り立つものとして受け止められてきたのである。したがって仏教の学びとは、仏道を求める道心を発し、そこに戒・定・慧の学びを実修してゆくことにほかならなかった。法然自身も、

されば出離の心ざしいたりてふかりしあひだ、もろもろの教法を信じて、もろもろの行業を修す。およそ仏教おほしといへども、詮ずるところ戒・定・慧の三学をばすぎず。いはゆる小乗の戒・定・慧、大乘の戒・定・慧、顯教の戒・定・慧、密教の戒・定・慧なり。〔真聖全〕四卷・六七九頁

と述べられるように、戒・定・慧の学びの道を歩いた人であった。そして、戒・定・慧の三学の実修において、かなしきかなしきかな、いかがせんいかがせん。ここにわがごときは、すでに戒・定・慧の三学のうつわ物にあらず、この三学のほかにわが心に相應する法門ありや。わが身にたへたる修行やあると、よろずの智者にもとめ、もろもろの学者にとぶらふ〔真聖全〕四卷・六八〇頁

ということに直面した人である。そのような深い断念のなかに、「わが心に相應する法門ありや、わが身にたえたる修行やある」と全存在を挙げて尋ね、その中で聞き取られた、

一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故。〔真聖全〕四卷・六八〇頁

という念仏の教えは、まさしく機教相應の法門であった。

このように、「三学のうつわ物にあらず」という法然が、その存在の一切を摂取し尽くす本願の念仏に領き得た時、法然は一切衆生が救済されてゆく道に領いたのである。善導によって、

ただ縁に遇うに異有るを以て九品をして差別せしむることを致す。〔真聖全〕一卷・四五三頁

と明らかにされたように、人間の存在とは、縁によって様々な在り方をするという遇縁存在にはかならない。その遇縁存在にとって「行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず」（『真聖全』一卷・九四四頁）という念仏こそが、何時でも・何処でも・誰にとっても開かれた普遍の行であり、まさしく「易」といわれる行である。その念仏において、縁によって様々な在り方をする一切の衆生が、その様々な違いにもかかわらず等しく往生の一道に立つことができるのである。

弥陀如来、余行を以って往生の本願と為したまわず。唯念仏を以って往生の本願と為したまえる。（『真聖全』一卷・九四〇頁）

と挙げられるように、本願は念仏の一事をもつて衆生往生の行とする。その本願の意を法然は、

故に知んぬ、念仏は易きが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通ぜざること。然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて本願と為したまうか。（『真聖全』一卷・九四四頁）

と推求し、そして、
然れば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんが為に、造像・起塔等の諸行を以って往生の本願と為したまわず。唯称名念仏の一行を以って其の本願と為したまえり。（『真聖全』一卷・九四五頁）

という「平等の慈悲」というところに聞き当てたのである。そして、この本願との値遇とは、様々な違いをもちながらも等しく念仏往生すべく生きている一切衆生との値遇であった。

法然の「ただ念仏」の仰せを、

いずれの行もおよびがたき身（『真聖全』二巻・七七四頁）

という身の信知をとおして聞き止めたのが親鸞である。如来の本願とは、

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。『真聖全』二卷・七九二頁

と語られるように、ひとえに「親鸞一人がため」の発願・修行として領受された事柄であった。そして、この「親鸞一人がため」という領きをおして、「それほどの業をもちける身」を生きる一切衆生に領き、その身に等しくかけられた本願に領いたのである。

明らかに知りぬ。これ凡聖自力の行に非ず。故に不回向の行と名づくるなり。大小の聖人、重軽の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。『真聖全』二卷・三三頁

と述べられるように、人間の救済の根拠が人間にはないことが明らかとなったとき、様々な違いをもちながら「みな同じく齊しく」念仏成仏すべく生きている一切の衆生との出遇いがあるのである。

(二) 空しく過ぐる者なし

しかし、救済の根拠は人間にはないという、自力無効のうえに念仏が領受されてゆくということが徹底されないならば、

親鸞、御同朋の御なかにして御相論のことそうらいけり。そのゆえは、善信が信心も聖人の御信心もひとつなり、とおおせのそうらいければ、勢観房・念仏房などもうす御同朋達、もてのほかにあらそいたまいて、いかでか聖人の御信心に善信房の信心ひとつにはあるべきぞ、とそうらいければ、聖人の御智慧才覚ひろくおはしますに一ならんともうさばこそひがごとならめ、往生の信心においては、またくことなることなし、ただひとつなりと御返答ありけれども、なおいかでかその義あらんという疑難あり『真聖全』二卷・七九〇～七九二頁

といわれるような疑難がおこるのも必至であろう。そこでは、それぞれの人間における智慧や才覚、経験、年齢など

の異なりがそのまま救済における違いとして持ち込まれていってしまう。この勢親房等も専修念仏において平等の救いの道を教えられた人々に違いないであろう。けれども、法然と親鸞との様々な違いに気をとられるあまり、「ただひとつなり」「おなじ」という世界が明らかでなかった。親鸞も、法然との智慧や才覚等の違いは熟知していた。しかし、違いは違いとして見えながら、しかも「ただひとつなり」「おなじ」という往生の信心の世界を、本願の念仏によって開かれていたのであった。親鸞が語るように、智慧、才覚等の各々における違いを認めること無くして「おなじ」というならば、それは人間の具体性を捨象した観念でしかないであろう。けれども、各々における違いだけでなく人間が見えないならば、それは自他差別の虚妄分別を一步も超えるものでない。そのような人間の虚妄な分別が破られていかないう限り、同じく念仏の教えを聞きながらも、一切衆生が「みな同じく斉しく」在るという世界は開かれてこない。

もともと、仏教は、すべてのものが救われていくことを目指した教えであった。けれども救いの根拠は人間にはないということを徹底して明らかにし得なかったがために、平等の救いは成就しなかった。親鸞は、

門余と言うは、門は即ち八万四千の化門なり。余は則ち本願一乗海なり。『真聖全』二卷・一五四頁

と述べて、一乗、則ち一切の衆生が等しく救われてゆく教えを、「八万四千の仮門」に簡ぶということをもって明らかにしている。八万四千の仮門とは、

心に依って勝行を起こせり。門八万四千に余れり。漸・頓すなわち各の所宜に称えり、縁に随う者、則ちみな解脱を蒙れる。『真聖全』二卷・一五四頁

といわれるように、人間の各発の道心に基づいて善行を修し、そのことを根拠として解脱を目指すものである。確かにそれは、教理としては掲げることが出来よう。けれども、

然に常没の凡愚、定心修し難し、息慮凝心の故に。散心行じ難し、廃悪修善の故に。是を以って立相住心なお成

じ難きが故に、たとい千年の寿を尽くすとも法眼未だかつて開けずと言えり。いかに況や無相離念誠に獲がたし。故に如来懸に末代罪濁の凡夫を知ろしめして、相を立て心を住すとも、なお得ることあたわじと。いかに況や相を離れて事を求めば、術通なき人の、空に居て舎を立てんがごときなりと言えり。『真聖全』二卷・一五四頁）と述べられるように、末代罪濁の凡夫には事実としては成就し得ないことなのである。そのような八万四千の仮門に簡んで開顯されていくのが「本願一乗海」である。

本願一乗海ということは、『教行信証』「行巻」に「本願力」「一乗」「海」として詳説されている。親鸞は、他力と言うは、如来の本願力なり。『真聖全』二卷・三五頁）

と述べ、「他力」ということを注意深く「如来の本願力なり」と押さえ直している。自己を救った南無阿弥陀仏は、明らかに自己を超えたものであり、「他」の「力（用）」である。他力ということについて親鸞は「行巻」において、しかれば真実の行信を獲れば、心に歡喜多きが故に、是を歡喜地と名づく。是を初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶墮なれども、二十九有に至らず。いかに況んや、十方群生海この行信に帰命すれば撰取して捨てたまわず。故に阿弥陀仏と名づけたてまつると。是を他力という。『真聖全』二卷・三三頁）

と述べている。そこでは、撰取不捨の力用こそが阿弥陀仏であると押さえ、それを他力と示している。けれどもその撰取不捨の力用ということが、自力無効ということのうえに領かれることでないならば、人間の修善では足りない部分を補うものとして、人間の修善と同質のものとして了解されていく。法然が明確に「本願の念仏には、ひとりだちをさせて、すけをささぬなり。」と言いつけるように、他力とは、相対有限の人間の助力を一切必要としない絶対無限の力用なのである。そのことを親鸞は、

ともかくも行者のはからひちりばかりもあるべからず候へばこそ他力とまうすことにて候へ。『真聖全』二卷・六

往生は何事も何事も凡夫のはからひならず、如来の御ちかひにまかせまいらせたればこそ、他力にてはさふらへ。
『真聖全』二卷・六六頁

と繰り返し述べて、人間のはからいが一切雑わらないことこそが他力なのであると示してゆく。往生ということは絶対無限の妙用によって成就する。それは相対有限の人間の祈願や修善の延長上にはないのである。それにもかかわらず人間は、相対有限の信仰や努力の延長上に往生があると思う。その自力の深い闇ゆえに発された本願に領くことに
おいて、

横超は、本願を憶念して自力の心を離る。是を横超他力と名づくるなり。『真聖全』二卷・一五五頁

といわれるように、初めて自力のはからいが破られてゆくのである。それゆえに他力ということは、本願ということ
を離れてはどこにもない。どこまでも自力無効において領かれる「如来の本願力」なのである。

本願力については、

『論』に曰わく。本願力と言うは、大菩薩、法身の中に常に三昧にましまして、種種の身・種種の神通・種種の説法を現じたまうことを示す。みな本願力より起こるを以ってなり。譬えば阿修羅の琴の鼓する者なしと雖も音曲自然なるがごとし。是を教化地の第五の功德相と名づく。『真聖全』二卷・三五頁

と表されてゆく。本願力とは、寂靜三昧にありつつ「種種の身、種種の神通、種種の説法を現す」る「大菩薩・法藏菩薩の力用である。動乱差別の中にある衆生を平等一味の世界へ呼び戻す本願招喚の力用である。それは、南無阿弥陀仏となって衆生に往生浄土の道を開く本願の名号の歩みに他ならないであろう。したがって、本願力とは、

即の言は、願力を聞くに由りて、報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。『真聖全』二卷・二二頁
といわれるように、聞かれるべき事柄である。衆生にとっては、聞名において往生浄土の道に立たしめられるということであり、その事実としてあるのが本願力である。苦悩の人生において、聞くということによってそこに道を開か

れてゆく言葉、それが、

撰取不捨の真言(『真聖全』二卷・一頁)

といわれる本願の番号である。「そらごとたわごと、まことあることなき」(『真聖全』二卷・七九三頁)言葉のなかで迷悶する人間に、道を聞く言葉が明らかとなるということが、法身のなかにおいて常に三昧にあって清浄の願行を行ずる法蔵菩薩の事実である。その法蔵菩薩の願行によって念仏者が誕生する。それゆえ、「ただ念仏」の教言に救われてゆくということ以外のなものでもないが、そのことが取りも直さず法蔵菩薩の願行に救われてゆくということである。そのような力用が本願力である。

一切苦悩の衆生の救済を誓う本願の番号であるゆえに、その本願に呼び覚まされた念仏者とは、

仏願に乘ずるを我が命とす(『真聖全』一卷・三二五頁)

と表されるように、阿弥陀仏の誓願を自己の深い願いとして聞き続けてゆく者である。自損損他してゆくような人間のうえに、自利利他成就ということが、自己の深い願いとして明らかとなってゆくのである。自己を超えた願いが、自己の深い願いとして明らかとなってゆくのである。このように、人間からは起こりようもないことが人間に起こってくることのいわれの深さが、

然にまことに其の本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり。他利と利他と、談ずるに左右あり。若し自ら仏をして言わば、宜しく利他と言うべし。自から衆生をして言わば、宜しく他利と言うべし。今まさに仏力を談ぜんとす。是の故に利他を以て之を言う。当に知るべし、此の意なり。(『真聖全』二卷・三六頁)

として表されてゆく。念仏者は、自己に成就した「普く諸の衆生と共に、安樂國に往生せん」(『真聖全』一卷・二七〇頁)という往生浄土の仏道の根拠を、自己に求めることはできない。なぜなら念仏者とは分限の自覚に立つ者であるからである。その分限の自覚において領受されることは、虚偽の自己に成就した仏道の根拠は真実なる如来の力用で

あり、「仏力」である。それゆえに、真実の仏道との出遇いにおいては、出遇った世界よりも出遇わしめた世界はさらに広く、得た世界より得さしめた世界はなお深い。それゆえに「利他」とは、尋ねても尋ね尽くせない深広さを語る言葉であり、自分は如来の世界を知り尽くしたという思いを打ち破ってくる言葉である。「利他」という言葉の「他」とは、衆生を指すものである。それは、「我（私）」ということを主張して止まない人間が、如来より「汝」と呼び掛けられる世界である。そして「汝」と呼び掛けられて在る自己に目覚めることを通して、自己の勝手な分別によって他人を解釈することを超えて、「汝」と呼び掛けられつつ生きる一切衆生に出遇う世界である。そのことは「みな阿弥陀如来の本願力に縁る」といわれるように、本願力によって初めて成就することである。そして、自己に出遇い、一切衆生に出遇うという、出遇いを生きる世界が人間に開かれてくるという事実こそ「一乗」ということの具体性があるのである。

親鸞は、「大利無上は一乗真実の利益なり。」（『真聖全』二卷・三四頁）「一乗究竟の極説」（『真聖全』二卷・四頁）などと言うように、本願の念仏の一道を度々「一乗」という言葉で表している。その一乗について、

一乗海というは、一乗は大乗なり、大乘は仏乗なり。（『真聖全』二卷・三八頁）

と述べ、「大乘」「仏乗」ということで押さえ直している。大乘といわれる仏道が課題としたことは自利利他の成就である。それゆえに、

若し声聞地及び辟支仏地に墮する、是を菩薩の死と名づく。則ち一切の利を失す。若し地獄に墮するも是の如き畏れを生ぜず。若し二乗地に墮せば、則ち大怖畏となす。地獄の中に墮すとも畢竟じて仏に至ることを得るも、

若し二乗地に墮せば、畢竟じて仏道を遮す。（『真聖全』一巻・二五三頁）

といわれるように、地獄に墮するよりも二乗地に墮することを怖畏し、墮二乗を克服して大乘菩薩道を全うしようとするものである。そして、自利利他の成就ということは、関係を生きる人間存在の根本課題を語る言葉にほかならな

いのである。その課題を尽くそうとするところに大乘菩薩道がある。けれども、自利利他を實踐し二乘地に退かないという不退転地を求めることが、各発の菩提心に基づくものである時、その作心において墮二乗ということが必然するのである。人間にとってその墮二乗を超克してゆくということは、

易行道は、謂く但信仏の因縁を以て淨土に生まれんと願ず。仏願力に乗じて、便ち彼の清淨の土に往生を得。仏力住持して即ち大乘正定之聚に入る。正定は即ち是阿毗跋致なり。『真聖全』一卷・二七九頁

と表される、仏願力に乗ずる往生淨土の仏道において初めて成就することである。それは、仏力住持の一道であり、そこにおいては、

大乘は二乗・三乗あることなし。『真聖全』二卷・三八頁

といわれるように、声聞・緣覺・菩薩という各別の道があるのではない。なぜなら、各別の修善による仏道とは、

唯是自力にして他力の持つなし。『真聖全』一卷・二七九頁

といわれるように、成就の根拠をもたない道だからであり、遂に成就することがない道だからである。そして、声聞・緣覺・菩薩の教えとは、その修善において自力無効に目覺ましめられ、

二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。『真聖全』二卷・三八頁

という、人間をして一乗に帰入せしむるべくしてあるのである。「唯是自力」の諸教と「他力持」の一道とは並立する事柄ではない。「他力持」の仏道とは、唯一の仏道として表される。しかしそれはただ、自力・他力、聖道教・淨土教というように相対分別されたなかでの優劣を問題にしているのではない。「他力持」の仏道とは、

或は此方にして惑を破し真を証すれば、則ち自力を運ぶが故に、大小の諸教に談ず。或は他方に往きて法を聞き道を悟るは、須く他力を馮むべきが故に往生淨土を説く。彼此異なりと雖も、方便に非ざること莫し。自心を悟ら令めんとなり。『真聖全』二卷・三八頁

といわれるように、自力・他力、聖道教・浄土教といわれる仏教全体の根底を貫く事柄が明らかとなるなかで掲げられた教えである。衆生をして、自力無効に目覚ましめ、本願に帰せしめんとする、

本願招喚の勅命（『真聖全』二卷・二三頁）

ということこそ、仏教を貫き、仏教の歴史を貫く事柄なのである。それゆえに、本願念仏の仏道とは、「門余」の教えであると示されるのであり、

一乗は即ち第一義乘なり。唯是誓願一仏乘なり。（『真聖全』二卷・三八頁）

と、並びなき一道として示されるのである。

その本願念仏の一道・「誓願一仏乘」は、

海と言うは、久遠より已来、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆謗闍提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、之を海の如きに喩うるなり。良に知りぬ、経に説きて、煩惱の水解けて功徳の水と成ると言えるが如し。已上。願海は二乗雑善の中下の屍骸を宿さず。何に況や、人天の虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の屍骸を宿さんや。（『真聖全』二卷・三九頁）

といわれるように、「海」に譬えられる。その「海」に譬えられる本願念仏の一道は、

凡聖、逆謗、齊しく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるが如し。（『真聖全』二卷・四四頁）

と述べられるように、衆生の様々な在り方の違いを超えて、平等一味の世界を開顕するものである。けれどもそれは、「二乗雑善」「人天の虚仮邪偽の善業」といわれるような、何事をも自分の悟り・救い・幸福を達成するための手段としていってしまう人間の深い闇が明らかにされてゆくということの他ではないのである。平等一味の世界を明らかにされてゆくことは、平等一味の感覚に心酔することなどではない。逆に、差別動乱の自己が初めて明らかにされてゆくということなのである。それは、平等一味の念仏の教えに出会いながらも、その念仏さえも各別の修善に

において各別の果報を求める方法としてゆくような人間の執心の深さを知らしめられてゆく道である。そして、そのような「罪惡深重煩惱熾盛」(『真聖全』二卷・七七三頁)の自己をたすけんとする本願に、

弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず(『真聖全』二卷・七七三頁)

という、一切の衆生が救済されてゆく道を領くのである。

そのような「海」の譬えをうけて親鸞は、

『浄土論』に曰く。「何者が莊嚴不虛作住持功德成就。偈に仏の本願力を觀するに、遇うて空しく過ぐる者なし。能く速やかに功德の大宝海を満足せしむとのたまえるがゆえにと言えり。不虛作住持功德成就は、蓋し是れ阿弥陀如来の本願力なり。今当に略して、虚作の相の住持に能わざるを示して、用て彼の不虛作住持の義を顯す。乃至言うところの不虛作住持は、本法藏菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る。願もって力を成ず、力もって願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願相府うて畢竟して差わず。故に成就と曰う。」(『真聖全』二卷・四〇頁)

と、不虛作住持功德成就を示している。この「空しく過ぐる者なし」という不虛作住持功德こそ、法然に出遇うことにおいて親鸞に成就した事柄であった。そのことを親鸞は、

曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば

このたびむなしくすぎなまし(『真聖全』二卷・五一三頁)

と表している。親鸞が法然より教えられた本願念仏の道は、

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし（『真聖全』二巻・五〇二頁）

と示される、「むなしくすぐるひとぞなき」道であった。その無空過の道とは、「海」の譬えに表されるように、平等一味に背反するような自身を知らしめられることを通して、平等一味の世界に帰せしられてゆく道であった。その道は徹頭徹尾「本法蔵菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る」ところの「他力持」の仏道である。そのような本願の念仏のみが、自他差別の孤独のなかに空過する人間をして、自己に出遇い、他者に出遇うという、出遇いを生きる人間を誕生せしめてゆくのである。